HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	後記
Citation	北大百年史, 通説, 1229-1238
Issue Date	1982-07-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/30055
Type	departmental bulletin paper
File Information	tsusetu_p1229-1238.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

後記

『北大百年史　通説』は既刊の「部局史」「札幌農学校史料(一)・(二)」に続いて、『北大百年史』全四冊を構成する最後の巻である。本書は、札幌農学校以来の変遷を一〇章に分かって概観する「通史」の部分と、北大百年の歴史の中で特徴的と思われる問題をあげて個別的に紹介検討する「北大百年の諸問題」の部分と、「史料」「統計」「年表」とから成っている。このような構成をとった理由、特に「北大百年の諸問題」という部分を設けた理由は、全時代を概観する通史的な記述の中では、特殊問題を立ち入って扱うことができないし、また通史の執筆に当たる編集員にとっては特殊問題をじゅうぶんに掘り下げて記述することは困難だろうと考えたからである。そのため、「諸問題」はそれぞれの専門のかたがたに執筆を依頼することとした。

「通史」について

扱う時期としては、開拓使仮学校設置の背景となった開拓使およびその西欧技術導入政策から筆を起こし、北海道大学創基百周年に当たる一九七六年（昭和五一）をもって終わることとした。おおよその執筆分担は、一～四章山田博司（編集員）、五・六章および一〇章永井秀夫（編集室長）、七～九章青山英幸（編集員）であり、七章以下については文学部東出功教授の補正執筆を願った部分が少なくない。また全体にわたって永井が目を通し、統一を図った。これまで北大が編集した通史としては『創基五十年記念北海道帝国大学沿革史』（中島九郎執筆、一九二六年）、『北海道大学創基八十年史』（高倉新一郎執筆、一九六五年）があり、本書の記述がこれらの業績に多くを負っていることは言うまでもない。このほか、部局編纂の歴史として、『北大医学部五十年史』（一九七四年）、『北大工学部五十年史』

（一九七五年）、『北大理学部五十年史』（一九八〇年）、『創立一〇周年記念北海道大学獣医学部史』（一九六三年）、『北海道大学教養部三十年史』（一九七九年）などがある。『北大百年史　部局史』とともに本学の教育・研究の発展を物語る有益な文献であり、本書執筆に当たって、これらの記述に依拠した部分も少なくない。

「北大百年の諸問題」について

選び出した項目数は約三〇であるが、これは北大の教育・研究の諸分野を網羅するものでは決してない。他の大学に比べた場合の北大の特質を示すという観点から、札幌農学校のいくつかの側面とともに、北海道や北方地域、植民地などと特にかかわりのある研究分野を主に取り上げて項目を編成したものである。それ以外の広汎な研究・教育分野を取り上げることは、紙数の点からも、編集室の能力から見ても不可能であった。各項目の記述は、特徴的な研究の発展を主とし、できる限り関連部科の教室史のみに流れないような配慮を執筆者にお願いした。「諸問題」はそれぞれ限られた枚数ではあるが、これまで表面的にしか知られていなかった問題に、新しい光を投じた力稿が少なくない。執筆者のかたがたに特に謝意を表したい。このうち「アイヌの形質人類学的研究」をお引き受けくださった伊藤昌一名誉教授は、脱稿直後に入院され、本年二月八日に急逝されたので文字どおり絶筆を頂いたことになった。心より御冥福をお祈りする次第である。

「史料」について

史料は東北帝国大学時代以降のものに限った。内容は、官制および学内規程、総長・学長式辞など、それに戦後改革の時期の諸構想と大学紛争史料および部局長一覧を付した。紙数の関係から、準備した史料のうちの相当な部分を割愛せざるを得なかった。官制や諸規程は制定時の形を復元するにとどめ、その後の改正を列記することはあきらめた。式辞等も、時代の雰囲気やその総長・学長の方針をうかがわせるという意味で代表的なものを選択した。戦前の

学生運動関係史料、イールズ事件関係史料、大学紛争後の大学改革検討史料などは割愛を余儀なくされた部分である。また、評議員の一覧を掲載できなかったのは残念である。

「統計」「年表」等について

統計は教職員数・学生数・卒業者入学者数などのほか、教職員定数の変化と、大学特別会計歳入歳出の変化とを表示した。大学財政は、特別会計のほかに、時期によっては文部省一般会計臨時費の中に新営費・設備費が組み込まれる場合があって、特別会計だけでは大学財政の全貌を示さない。この点を補完できなかったのが心残りである。統計の形で表示したので、年表からは教職員定数に関する勅令を省いた。年表は、「大学一覧」所載の年表、『北海道大学創基八十年史』の年表、各部局史の年表などを基礎とし、『北海道帝国大学新聞』など学内の定期刊行物、『北海タイムス』など学外の新聞から関係事項を採集し、その他関係文献や学内の簿書等から確かめ得た事項をもって編集した。なお、付録として、札幌キャンパスの配置図四枚を年代順に選び、これを添えた。函館キャンパスの適切な図面が得られなかったのは残念である。

以上の作業のうち、統計の作成は山本篤子、河西英通がこれに当たり、年表の編集は蓮池美幸が担当した。また各新聞から北大関係事項を採録する作業は、高橋純、高野宣行、出利葉浩司の三名が分担した。このほか史料整理に協力した人々に塩谷朋子、源洋子がある。これらの人々は非常勤の形ではあったが、欠くことのできない編集作業を分担し、編集室員と苦楽をともにした感があった。編集助手の石見和子（旧姓竹名）、近藤桂子は史料の蒐集・整理および編集作業のほか、編集室の事務を担当した。以上のほか、名誉教授朝比奈英三は編集室顧問として、「北大百年の諸問題」各編の編集および執筆内容の調整、さらに通史原稿の校閲等、多方面にわたって編集室に助力と激励を与えられた。これらの協力なくしては、本書がこの時期に、このような形で完成することはなかったであろう。

また、本書の執筆に当たっては、関係書類の検索、歴史事項の追跡や確認など、庶務課・人事課・管財課・主計課・入学主幹およびそれぞれの関係部課をわずらわしたことが少なくない。協力を惜しまなかった職員のかたがたには、この場を借りて謝意を表したい。

＊　＊　＊　＊　＊

本書の発行をもって、『北大百年史』の出版を終わり、北海道大学百周年記念事業実行委員会出版専門委員会および北海道大学百年史編集室の任務を完了することになった。出版専門委員会の設置から数えて六年七カ月、百年史編集室の設置から六年を経過している。最後に今日までの編集経過を略記しておきたい。

大学史の編集が具体的な計画となったのは、一九七四年（昭和四九）当時の丹羽学長のもとで、北大百周年記念事業の計画が練られたときであった。丹羽学長は七つの部局から推薦されたメンバーに図書館長を加えた世話人会に、大学史の規模・内容等について諮問した。世話人会は、『百年史』は通説・部局史・史料編の三部から構成し、全体で三〇〇〇ページ（A5判）程度の規模が適当であろうと考え、写真集・小史などを別途に考慮すべきである旨を含めて答申した。

翌七五年六月に、今村新学長のもとに北海道大学百周年記念事業実行委員会が組織され、八月には他の専門委員会とともに出版専門委員会が組織された。この専門委員会は、さきの世話人会の答申を基礎として、『北大百年史』および『写真集北大百年』（北大小史の記述を含む）の編集・発行を任務とすることになった。前年に世話人会のとりまとめに当たった永井秀夫（文学部）が、出版専門委員会委員長となり、以後長期にわたって大学史編集の責任を負うことになった。委員は委員長・図書館長のほか、各学部・教養部・各研究所・図書館から各一名を委嘱した。出版専

門委員会が発足したのち、同委員会に副委員長を置くこととなり、農学部教授高嶋正彦がこれに推された。

出版専門委員会委員は、中途で交替した委員をも含めて左記のとおりであった。

委員長　文学部　永井秀夫
副委員長　農学部　高嶋正彦
委員　文学部　田中彰
　　佐藤一郎
教育学部　高山武志
　　鈴木秀一
法学部　松沢弘陽
経済学部　長岡新吉
理学部　門馬栄治
　　金子元三
医学部　小林博
　　児玉譲次
歯学部　富田喜内
薬学部　三橋博
工学部　北郷繁
農学部　高嶋正彦
　　高尾彰一
獣医学部　大林正士
水産学部　川村輝良
　　高木光造
教養部　佐伯有清
　　水野一
低温科学研究所　朝比奈英三
　　小島賢治
応用電気研究所　羽鳥孝三
触媒研究所　戸谷富之
免疫科学研究所　有馬純
図書館長　早川泰正
　　高嶋正彦
　　塩谷饒
図書館　秋月俊幸

出版専門委員会は、まず『写真集　北大百年』の編集に当たった。一九七六年九月十五日の百周年記念式典に間に合わせるため、比較的短期間に編集を進め、北海道大学図書刊行会に製作を依頼して九月十五日付けで発行し、式典参

列者や募金に応じた人々に配布することができた。その編集経過は同書の後記で述べたとおりである。『北大百年史』編集のために、一九七六年四月に北大百年史編集室が設置された。場所は史料文献との関係から附属図書館内を希望し、図書館の配慮によって、図書館五階東側の一室を利用できることとなった。編集員として学内から大学史に関連する諸分野の教官の参加を得、また専任の編集員として文学研究科の修士課程を終わった青山英幸・山田博司の二名を得ることができた。この二名が、その後、史料の蒐集選択や解読、通説の編集や執筆などのほか、原稿の指定校正に至るまで、『北大百年史』編集のほとんどの作業の中心となった。今日までの編集室のメンバーは次のとおりである。

編集室長　永井秀夫（文学部・出版専門委員会委員長）
編集員　高嶋正彦（農学部・同副委員長）
〃　秋月俊幸（図書館北方資料室）
〃　朝比奈英三（低温科学研究所・一九七八年四月まで）
〃　遠藤一夫（工学部）
〃　大崎恵治（農学部）
〃　佐伯有清（文学部）
〃　田中　彰（文学部）
〃　長岡新吉（経済学部）
〃　松沢弘陽（法学部）
〃　（専任）青山英幸
〃　（専任）山田博司

編集助手(専任)石見和子（旧姓竹名、一九七七年四月～七九年三月）
〃　(専任)近藤桂子（一九七九年四月～八一年三月）
顧　問　高倉新一郎（名誉教授）
　　朝比奈英三（名誉教授・一九七八年五月より）

一九七六年七月には、『写真集北大百年』の作業が実質的に終わり、この時期から『北大百年史』の編集作業が開始された。以下刊行の順序に従って、各編ごとに編集の経過を記す。

「部局史」について

七六年七月に、部局別執筆枚数と執筆の要項を定め、名部局ごとにその部局の出版専門委員会委員が中心となって執筆することとした。原稿の完成は七八年三月に予定し、連絡調整をとりながら作業を進めた結果、大半の部局が七八年の七月から十一月にかけて脱稿した。その後章別構成や表現の統一のため、多少の補正をお願いし、ごく一部の部局を除いては七九年五月までに最終原稿を仕上げた。株式会社「ぎょうせい」に出版を委託することを決定したのはこの三月であった。七九年七月から原稿を出版社に引き渡し、一部は遅れて十月に最終原稿を引き渡したが、翌八〇年三月に発行を間に合わせることができた。部局ごとに記述の重点の置き方や表現の仕方に差違があったが、技術的な統一以外に無理な調整は行わなかった。

「札幌農学校史料」について

史料編として札幌農学校関係史料の覆刻を行ったことは、『北大百年史』の特色と言ってよい。「札幌農学校史料」は、本学所蔵の札幌農学校関係簿書記録類の抄録に、開拓使文書、太政官―内閣文書などから摘出した関係史料を織り込み、それに外国人教師書簡や開識社記録などを加えて編集する計画であった。その趣旨については、同書の

後記に記したとおりである。編集室はまず札幌農学校簿書目録を作成し、七六年七月から、一〇〇〇冊に及ぶ簿書群を通読して重要度の高い史料を選択し、解読・筆写する作業にとりかかったが、容易に進展しなかった。一九七七年の夏から、それまでにおおよその選択を加えた文書を、規則・人事・行事・学生生活などの諸項目に分類し、編集員が分担通読してさらに採録文書を絞った。七八年七月には、四〇〇字詰原稿用紙約六〇〇〇枚の第一次草稿が仕上がり、これから史料の欠を補いながら、全体としては大幅に縮小する計画で作業を進めたが、七九年春に第二次草稿として残ったのは、やはり五〇〇〇枚近いものであった。やむを得ず「札幌農学校史料」を二分冊とすることとし、また帝国大学時代以降の史料は「通説」に載せることとした。その後再度原本との照合を行った上で八〇年の六月から八月にかけて原稿を出版社に引き渡し、翌八一年の四月および七月に二つの分冊が発行された。「札幌農学校史料」の作成に当たっては、編集員・編集助手のほか前田徳泰、鬼柳規子、小賀坂侑子の協力が大きかった。

「通説」について

本書の内容構成や趣旨については前に記したとおりである。このような構成をとることについては、一九七七年夏以降の編集室会議で審議され、七八年九月からは通史の章別構成や「諸問題」の項目・執筆者の選定について、またおよそのページ数の配分について検討された。「通説」の構成や諸項目が最終的に確定し、出版専門委員会の了承を得たのは、一九八〇年（昭和五五）初頭であった。これまでの期間に、事務局所管の庶務会計書類の調査、国立公文書館・国会図書館・外交史料館・大蔵省財政史室・東北大学記念資料室などにある北大関係史料の調査蒐集、佐藤・内村・新渡戸に始まる大学関係者の関連史料の調査など、各種の史料蒐集が進められた。

一九八〇年二月に、「北大百年の諸問題」各項目の執筆を依頼し、八一年三月までに過半の原稿が完成したが、さらに内容や表現について改訂、補筆を重ね、八一年十二月に最終稿が完成した。一方、「通史」については八〇年の

夏から執筆に着手したが、執筆に専念できるようになったのは八一年の春からであった。「通史」部分の完成は「諸問題」各項目より遅れ、一部の原稿は八二年一月まで持ち越すことになった。このため、「通説」全体の原稿は八一年十月から八二年一月にかけて出版社に引き渡され、八二年七月刊行の見通しを得たのである。八一年度の最後の半年間は、編集室のメンバーにとって最も苦しい期間であった。

最後に、編集経過に付随して、次のことを付け加えたい。一つは、編集を円滑にし、執筆以前の予備的な研究や史料紹介を試み、大学関係者や関連機関との連絡を密にするために『北大百年史編集ニュース』を刊行したことである。このニュースは、一九七七年六月に第一号を発行し、八〇年十一月に第十一号を発行した。しかし、それ以後編集室が執筆態勢に入り、極端に多忙になったため、発行を継続する余裕がなくなった。A5判三〇ページ足らずのニュースではあったが、期待した効果はある程度得られたと考えている。

もう一つの点は、大学史編集を側面から支えるため、札幌農学校研究のチームを編成して科学研究費の助成を受けたことである。これは「日本近代史における札幌農学校の研究」という課題で、永井を研究代表者とし、編集室メンバーの大半を研究分担者として、農学校のさまざまな側面を検討した。一九七七年度から七九年度にかけて研究助成を受けたものである。農学校に対する共通の理解を深めるのに役だったと思う。

以上のような経過をたどって、ようやく『北大百年史』が完成した。当初の計画であった三冊三〇〇〇ページという規模は、「通説」「部局史」それぞれ約一五〇〇ページ、「札幌農学校史料」(一)・(二)を合わせて一七〇〇ページ余、合計四七〇〇ページを超えるという結果となった。編集期間も当初の四年計画が、最終的には六カ年を費やしたことになる。これは永井が一九七八年四月から二年間文学部長の職に就いたために、仕事に遅れをもたらしたという

面もあるが、内容の拡張に伴って仕事量が増加したということでもある。大学史編纂のテンポとして、決して遅い方ではなかった。編集員・編集助手のかたがた、出版専門委員会委員および部局史執筆委員のかたがたの努力に対して、改めて敬意を表するものである。

史料蒐集の面では、前記の諸機関のかたがたや北大関係者の遺族のかたがたの協力を得、学内史料に関しては学内諸部課の協力を得たほか、附属図書館北方資料室には史料および編集について全面的な協力と教示を得た。大学沿革資料を集積してきた北方資料室が存在しなかったとしたら『北大百年史』の編集はこれほど円滑には進まなかったはずである。

この出版事業は、他の記念事業とともに、北海道大学創基百周年記念事業後援会（会長犬飼哲夫）に結集した同窓生・教職員その他関連企業・団体の醵金を基礎として進められてきたものである。出版の事業を終えるに当たって、改めて関係者に謝意を表したい。

また編集・出版の遂行に当たり、庶務的な面と経理面を担当した庶務部庶務課、経理部経理課、および編集の場を提供してくれた附属図書館に対して感謝するとともに、製作に当たった「ぎょうせい」関係者の努力を多とするものである。

一九八二年三月

北海道大学百周年記念事業実行委員会
出版専門委員会委員長

永井秀夫

凡　例

(1)　年代，月日について

年代，月日の表記は西洋紀年・陽暦を用いたが，明治5年までは陰暦の月日を用いた。

(2)　法令について

法令は原則として公布日を採り，公布日と施行日とが相異する場合には施行日を併記した。法令公布の日付は，当該法令登載官報の日付を採用した。なお勅令の場合は（勅〇）と略記した。

(3)　参照文献について

一部の項目は，末尾に〔　〕をもって参照文献を示した。ただし，本年表の各項目の記載は，その参照文献の記述を補正したものもある。略記号は以下のとおりである。

五史――創基五十年記念北海道帝国大学沿革史
八史――北海道大学創基八十年史
部局――北大百年史　部局史
史料――北大百年史　札幌農学校史料(一)，(二)
年報――札幌農黌年報
一覧――札幌農学校一覧，東北帝国大学農科大学一覧，北海道帝国大学一覧，北海道大学一覧
時報――北大時報
理史――北大理学部五十年史
医史――北大医学部五十年史
工史――北大工学部五十年史
教養――北海道大学教養部三十年史
寮史――恵迪寮史
学芸――学芸会雑誌
文武――文武会雑誌，文武会々報
大新――北海道帝国大学新聞，北海道大学新聞
北毎――北海道毎日新聞
北海――北海タイムス
道新――北海道新聞
小樽――小樽新聞
東朝――東京朝日新聞
東日――東京日日新聞
大毎――大阪毎日新聞
報知――報知新聞
読売――読売新聞
年鑑――北海道年鑑
道史――新北海道史第9巻年表

北大百年史　通説

一九八二年　七月一五日　印刷
一九八二年　七月二五日　発行

編集・著作　北海道大学

印刷・発行　株式会社　ぎょうせい

本社営業所　東京都新宿区西五軒町五二
北海道支社　札幌市中央区北二条西二〇―一―三
電話（〇一一）二四一―一九七一